
「光のディスプレイ」としての絵画

——《Cel 4》(1926-1935)を中心に

川島 恵

発表要旨集掲載のものとは内容が異なります。

発表要旨

ラースロー・モホイ＝ナジ (László Moholy-Nagy, 1895-1946) は、20世紀前半のヨーロッパ及びアメリカ美術界において、平面(絵画)、立体(彫刻)、環境(建築)にまたがる空間造形全般についての再編成・再構築を試みた。つまり、点、線、面、明暗、色彩、量塊、内部空間、被膜(カバー)といった諸造形エレメントの形状や機能を、絵画や彫刻、建築といった伝統的枠組みからいったん切り離し、あらためてエレメントの特性を取り出しつつ、それらの独特な組み替えや接合を試みたのである。多様な作品制作を通じて大きな成果を収めたモホイ＝ナジの試みのなかで注目すべきは、平面造形の革新であろう。なぜならそこに、この芸術家の実験が集約的に提示されるからである。

その点で、本発表では、従来検討の加えられていない平面作品《Cel 4》(1926-35年、イエール大学美術館蔵)に注目し、アメリカでの資料調査、作品観察経験に基づいて考察を行った。モホイ＝ナジは1920年代後半から1930年代初頭にかけて、「私からみると、新しい技術と芸術制作が可能になった今の時代に、今日的な[芸術家の]義務にそぐわない、古いメディア[絵画]で制作をおこなうことは、無意味に思われてならない」と述べ、一時期、絵画制作を中断する。しかし、1934年のフランチェク・カリボダへの書簡では、自身がメディアとの関わり方の態度を変えつつあり、表現手段としての絵画制作の意義をあらためて積極的に再確認している様子が読み取れるのである。本作品は、まさにモホイ＝ナジの絵画制作の中断・再開の時期に制作されており、1920年代半ばから始められた多種多様な素材による平面造形の実験のなかでも、造形方法の根本を追究した重要な作例で、半透明な合成樹脂を用いた数少ない現存作品である。本作品は、基底部である白い木板から空間をあけてセルロース板がそえ付けられ、セルロース板には表面と裏面から着彩がなされている。つまり、木板、空間、裏面の顔料、セルロース板、表面の顔料、という5つの層構造によって成り立っている。20世紀初頭には、コラージュをはじめとして複数面をひとつの平面上で重層化する造形が多様になされたものの、モホイ＝ナジの試みは、平面それ自体の複層化であった。支持体が光を透過・反射することによって、強調される層(Layer)が変化し、色彩や陰影の著しい変化が平面造形上において可視化されるのである。

本発表ではこの作品制作のうちに、19 / 20世紀転換期ドイツやバウハウスの芸術家に多大な影響を与えた同時代の大衆科学との関わりに着目した。そのなかでも、とりわけモホイ＝ナジが著作において言及し、強い関心を寄せていた生物学者ラウル・ハインリヒ・フランセ (Raoul Heinrich Francé, 1874-1943) が提唱した、有機体の合目的な機能を科学技術に応用するという「生体工学 (Biotechnik)」の関心をあとづけた。すなわち、本作に使用された合成樹脂素材セルロースは、フランセの重視した「プラズマ」という根源的な物質様態に対応しており、また、《Cel 4》における透明な「層 (Layer)」にもとづく平面造形は、細胞の外被膜層が備えもつ、物質の透過・浸透を許容する「限界なき運動性がとる技術形式」の機能を模倣し造形化したものであると考えられるのである。

こうした試みは、従来の絵画における線・面・色彩による内発的運動感をもたらす表現とも、映画のような物理的時間性の表現とも異なり、光のあたり方や観者の身体位置によって可視化する「相 (Phase)」が流動していくという独自の造形である。それは相転移による「モデュレーション (変調・調節)」の働きを実現する方法であり、空間における革新的な時間感覚、知覚体験をもたらす平面造形の試みにほかならなかった。

(慶応義塾大学)